

六花

RIKWA

10

俳句雑誌りつか

2016 (平成28年)
cover design Yuna Mizuno

脇道に遊ばや雁来紅暮るる
サルビアを吸へと女の薄笑ひ
山国のちやぼは紅白水澄んで
山椒の実前歯に割りて悶えけり
鬼灯すだれ縁側に茶をいただきぬ
大岩の下秋冷の鶏地蔵
栗飯や杉の箸置き杉の箸
秋風やみたらしのたれ火に焦げて
秋の蚊を平手打ちせる智頭女
秋の炉に振り向いて靴履きにけり
秋雨に迷ひ因幡のそばすする
朝寒や玻璃戸の端に破れ蝶
中腹の夜明けで庭のぬれ落葉
毛物らに木の実の森の夜明けかな
小鳥来る捨籠二つ並べあり
をちこちに落葉の飾る蜘蛛の糸

目の端に小さな木の葉散りにけり
雁が音や推敲の手の更けてきて
風遠く因幡の国のもさ曇り
もさ曇り沖に二つの島添うて
砂で砂洗ふ渚やもさ曇り
砂防垣繕ひゐたる猛者海老曇り
大砂丘帰りも急登秋時雨
時雨伞濡れてる方が濡れてゐる
秋時雨戻るに杖も傘もなし
身にしむや砂丘の底の地獄釜
身に入むや足跡に足取られぬて
沖遠し白兔海岸もさ曇り
鳥取は北の明るき砂丘かな
もさ曇り砂の断崖のぞき込み

雪嶺抄 打水 笹村 政子

青白き炎 一閃 毛虫焼く
下がりくる桜毛虫をかはしけり
大瀧の音のけだるき真昼かな
夏山にとよもす雲の湧きにけり
のたうちし形に蚯蚓の乾びをり
切れ目なく敷居を渡る子かまきり
青草を亀の踏みゆく匂ひかな
踏んばりの緩んできたる梅雨の亀
打水の足をながして終りけり
ふたたびの癌告げらるる夫涼し

水音に生けてありたる半夏生

延川五十昭

みずおとにいけてありたるはんげしょう のぶかわいそあき

水音に活けてありたる半夏生

山鉾や緞帳飾りの房揺れて

もてなしの玉露味はふ夏座敷

木蔭から鳥たちの声枇杷たわわ

苞もちてたづねる門の凌霄花

半夏生が水音のする所に生けてあるのを「水音に」と単純平穩ながら半夏生草の瑞々しさをよく表現している。「半夏生」はいわゆる七十二候の一つ、夏至から数えて十一日目にあたる。掲句の半夏生草は多く水辺に生じ、葉の一部が白く変化して、今年も本格的な夏が来たなあ、と目でも実感する。また半夏生草は見て涼やかで水音に咲くに相応しい。「半夏生」は、気候と植物の二つをいうが、この句の場合は生けてあるというのだから、植物の方である。五十昭は墨画をよくするから、一幅の画の様に観じたのであろう。また、そのように言葉で描いてある。「水音に」が佳い。

不死男忌や子は難産で生まれ来し

赤松有馬守破天龍正義

ふじおぎやはなんざんでうまれきし あかまつありまのかみはてんりゅうまさよし

傘の柄に枇杷の実手繰り寄せにけり

軍手にも枇杷ふくらませ戻りけり

不死男忌や子は難産で生まれきし

盛夏なり開店休業なる魚魚屋

秋元不死男先生に「子を殴ちしながき一瞬天の蟬」というのがある。その句をふまえて難産の句を鑑賞したい。あれほど難産で心配した子どもだったはずが、成長するにつれ叱ったり、怒鳴ったり、殴ることも起きる。子は自分が生まれてきたときのことを親から聞き、親は子が生まれて来た時の事を考えると反抗したり、殴ったり出来ない。殴って大きな後悔をする。生まれてくるとき、五体満足だったらどんな子どもでもかまいません。無事に生まれて来ますようにと祈って、やっと生まれて来た子ではないか。その当手を振り返り我が子を見るべし。掲句、実に不死男忌に叶っている。

雪卿集

滝

出口

誠

むらさきの中に白あり七変化
滝の落つ水面にもやのかりけり
風起こし飛沫浴びせて滝が落つ
細々と一木だけの滝も落つ
滝の水岩に当たりて太くなる

蚊喰鳥

升田ヤス子

蚊喰鳥仏間に迷ひ込みきたる
石白の子子の水掬ひけり
白南風や舟の生簀に手長蛸
おはぐるの禪寺の風散らしけり
日詣のけふは茅の輪をくぐりけり

雪卿集

枇
杷

永田万年青

手の届く処に枇杷のたわわなり
結界に降りそそぎゐる蟬しぐれ
境内を止まることなき揚羽蝶
汀にて服着しままの水遊び
夕焼けや石の鳥居に乗る小石

指
籠

佐津のぼる

鷺発ちて田の面に起てる風青し
川原湯の葦簀困ひに人の影
指籠より蛩を闇へ返しけり
かさこそと夜を醒めてをりかぶと虫
投げおろす直球の音夏旺ん

雪卿集

梅雨の

雷松本文一郎

梅雨の雷勝負どころの待つたかな
夕立来ジョッキの残り急ぎ飲む
一条の線路に沿ひし青田風
おどろげな河童出づるか半夏生草
夜目遠目まさしく烏瓜の花

雨蛙

志方章子

夏帽子脱ぎて湯気たちみたるかな
いづこより来しや窓辺の雨蛙
鮎焼いて料理上手の母に似ず
道端に百足礫かれてをりにけり
老鶯の一声浴ぶる物思ひ

雪樹集

半夏生

住田千代子

湿りたる風白がちに半夏生
亀の子の岩に着くまで見届けぬ
伐りくれし枝より枇杷を挽ぎにけり
湿り帯ぶ花殻を摘む小暑かな
線陰に緋の光降り来たる

凌霄花

廣畑育子

平穏と七夕竹に吊りにけり
鬼灯や虫食跡のうつくしき
凌霄花や川辺の家に御灯明
月涼し投函あとの遠回り
後れ毛を曳く粘りあり蜘蛛の糸

蛩雪譚

六甲選

二十八年十月号鑑賞

秋灯に（永田耕衣続俳句集成）「只今（しこん）」をふと手にして、耕衣翁を訪問した時のことを思い出している。―西東三鬼のことを聞きたい―ということなら、と二階の書齋へ応じてもらった。詳しくは別の機会に。ここでは耕衣の句についてひとこと。耕衣作品は解らないというのが通説。しかし、彼の詠んだ一句一句に踏み込んだわけではないだろう。

たしかに膨大な難解であるが、太陽風のように、毛穴を突き抜けて琴線にまで届く句も少なからずあるのではないか。耕衣の有名な句は省くが、今主宰には「空蟬に入らむと待てる空気哉」「河骨や天女を破りたる如し」の二句が頭を駆けめぐっている。擬人化された空気は蟬の羽化をじっと窺い、羽化が終わるやいなや、蟬の脱ぎ捨てた殻へ瞬時に空気が入り込んで空蟬を乗っ取る。河骨の句は天へ突き上げるような蕾の形状から少年の一物を思わせるし、開きかけた様は天女が乙女でなくなつたことを連想させる。中村草田男は「白百合や天使は聖母より潔し」と詠んだ。それは聖母マリアがすでにキリストを妊り産んだのだから乙女ではないということをも前提としている。耕衣のいう河骨の花と違い、西洋はバラ・ユリ・スマシレが聖母マリアの花とされ、男はそれらの花に踏まれるが、耕衣の河骨は天女を破る。天女は天部に住むとされ、天帝などに仕える女官。姿は人間で羽衣と呼ばれる衣服で空を飛ぶとされるが、この羽衣を奪われたばかりに空に帰れなくなり、地上の男性と婚姻する（余呉湖羽衣伝説）、と東洋的。しかし、百歳近く俳句に若返り、天女とまぐわうことを夢想する耕衣の瑞々しく生々しい感覚に驚く。体は衰えて

も詩精神はさらに研ぎ澄まされ、若さを遡及し続けた永田耕衣を見直そうか。その他、耕衣作品「死神と逢う娯しさもかきつはた杜若」の本意は明らかに森澄雄の「死ぬ病得て安心や」を触発し岡本高明の「ちちははの逝きし安心秋澄みぬ」へと多くの俳人に影響を与えている。ところで澄雄の句、死ぬ病：…の下五を忘れていたが、それは取り合わせの欠点である。ちなみに……答えは（草の花）。さて六花の連衆の「三年先の稽古」たる作品を観じよう。

梅雨の雷勝負どころの待つたかな 松本文一郎

雷と勝負をしているのではない。これで大手、と思つた瞬間相手から「待つた」がかかった。囲碁か将棋の場面で、作者は雷に乗じて勝負の一手を打つたのに、相手は気が付いてしまったのだ。えつ、待つたなしよ、「いいやちよつと待つてよ、雷のせいで」「雷関係ないだろ」「いいや、気が散つたんだ、まさか雷がいきなり……、硬いこと言うなよ、この前は俺が待つてやつたんじゃねえか……」「よく言うよ、いつもなんだからねえ、今日は待てねえよ」「じゃあ何か、俺が貸した千円まだ返して貰つてねえぞ」「それとこれとは違うだろ、話がすり替えられてるよ」「じゃあ、もういい、今日は帰る」「ああ帰れ、二度と来んなよ」「来てやるもんか」。売り言葉に買い言葉お互いにあとへ引けない。でも三ヶ月くらいすれば再び敵はもどつてくるのであろう。落語のような作品。

夏帽子脱ぎて湯気たちみたるかな 志方 童子

まさか作者が帽子を脱いだのでは無いと魚やう。おそらくお孫さんだろ。元気な子は熱くても汗発に動く。時折帽子を脱ぐと籠もつた熱に湯気が立つのである。主宰も若い頃はこのようなになった経験がある。夏はとも知らず汗発な子どもに安心し、その若さをうらやむのである。でも、あまり頭を蒸すと野球選手のように若い時から薄毛になるから注意。

